

「国家（上・下）」

プラトン(著) 藤沢令夫(訳)

岩波文庫 1979年4月16日刊

本書はプラトンの主著であると同時に、ギリシャ哲学、いや人類の思索の一大到達点を示しており、これまでハイデガー、ニーチェ、ヴィーユ、ポパーら幾多の哲学者が立ち向かうべき目標としてきた古典中の古典である。

最近では、アメリカの保守政治思想を持ったネオコンとよばれる人たちの間でも本書が熟読されているという。その背景には一部のエリートによる社会改良の可能性を示唆した哲人政治の思想に惹かれているのではないかとされているが、本書はそのような一面的な読み方ではすまされない深い内容をもった書物である。

本書の構成を簡単に説明すると、第1巻では正義についての予備的議論が与えられ、その後、第2巻から第4巻までは主として、理想的な国家と人間について論じられている。第5巻から第7巻で形而上学的、認識論的学説についての詳しい検討がなされ、第8巻と第9巻で様々な政治体制の比較が行われ、第10巻で芸術、徳や魂の不滅などについての論考が与えられる。

政治経済学の観点から重要だと思われる論点を選ぶと、第4巻では「われわれが国家を建設するにあたって目標としているのは、そのなかのある一つの階層だけが特別に幸福になるように、ということではなく、国の全体ができるだけ幸福になるように、ということなのだ」と主張され、それを達成するために、第5巻の哲学者が統治者となるべきであるという哲人政治宣言に結びついていく。第8巻では4つの政治制度、スパルタ的国家、寡頭制、民主制、専主独裁制について、いかにしてこのような政治体制が成立し、維持されるか、そして崩壊していくかについて、極めて冷徹な分析が与えられている。この議論は、20世紀に入って、ナチズムに代表される全体主義や社会主義など人類が実際に経験してきた政治体制にもそのまま適用できるものである。

本書のもう一つの哲学的な特徴は、議論のプロセスを明確化し、重要な点は「イエス」か「ノー」に分かれるように進行するので、議論が紛糾した場合には、その分岐点までもどって別の可能性を考えればよいようになっている。これは現代プログラミングにおけるアルゴリズムと全く同じ考え方であり、論理学のルールが厳密に守られていることがわかる。

言うまでもなく、プラトンの論法は、我が国の対立的、情緒的レトリックを使った論争とは全く異質のものである。それは、ソクラテスやプラトンの究極の目的が真理を学ぶことにあり、そのためには議論で負けてもいっこうにかまわないし、むしろそのことが自らの「無知を自覚」することにつながれば、自分が誤謬から解放され、新しい喜びに結びつくと考えからである。今こそプラトンに学ぼう。